

訳者解説

慎改康之

『ミシェル・フーコー講義集成 8 生政治の誕生』

(筑摩書房、2008年)所収

これは MicrosoftWord によって作成した原稿を pdf 形式に変換したものです。

『講義集成 8』に収録されているテキストと若干異なる部分があります。

訳者解説

本書『生政治の誕生 コレージュ・ド・フランス講義 一九七八—一九七九年度』は、Michel Foucault, *Naissance de la biopolitique. Cours au Collège de France* (1978-1979), Paris, Gallimard / Seuil, 2004 の全訳である。

「講義の位置づけ」にもあるとおり、ミシェル・フーコーによるこの年の講義は、一九七七—一九七八年度講義『安全・領土・人口』の延長上に位置づけられるものとして開始される。実際、彼がここでまず示そうとするのは、前年度講義の分析対象とされていた十六世紀以来の国家理性が、十八世紀になると政治経済学を原理として内部から制限され始め、それとともに統治のための新たな合理性が登場するという歴史のプロセスである。そのように出現する新たな統治術としての自由主義について、まずその種別の特徴を明らかにし、次いで現代においてそれがどのような変容を被っているかを分析した後、最後にその一般的枠組のなかに「生政治」の問題を位置づけること。これが当初の計画であった。しかし講義は、「最終的にその全体を、その単なる序論となるはずであったものに捧げる」ことになるだろう。つまりフーコーは、現代のドイツおよびアメリカにおける新自由主義の問題に予定よりも多くの時間を費やすことになり、「生政治」をめぐる考察、すなわち「健康、衛生、出生率、寿命、人種といった諸現象によって統治実践に対し提起される諸問題を、十八世紀以来合理化しようと試みてきたやり方」をめぐる考察は結局、いわばその準備段階において終わってしまっているのである。そして次年度の講義がここから大きく方向を転換し、原始キリスト教における良心の究明と告白の問題へと向かうことを考えあわせるなら、一部の読者にとっての失望は想像するに難くない。近年さまざまなやり方でとり上げ直されている「生政治」についての直接的で具体的な分析を、その出生地とされているフーコー自身の言説のなかについに見いだせるのではないかという期待は、あえなく裏切られてしまうのである。

しかし、そうした特定の願望を充足させないからといって、本書の意義が損なわれるわけではもちろんない。実際、ここに提示されているテキストそのものに対し多少とも

繊細な視線を注いでみるなら、本書は、少なくとも以下の三点において、極めて興味深いものとして我々の目の前に立ち現れるように思われる。

まず、フーコーにおけるいわば例外的な身振りがここには見いだされるということ。すでに指摘したとおり本書においてはいわゆる新自由主義の問題をめぐる考察に多くのページが割かれているわけだが、現代史の領野に彼がこのように大きく踏み込むのは、その著作においても講義においても極めて稀なことである。彼の通常の研究領域からのこうしたある種の逸脱について、いったいどのように考えればよいのだろうか。

次に、この書物が、権力関係や統治術を扱う七〇年代のフーコーの研究と、彼の六〇年代の「考古学的」著作とのあいだに、一つの明確な関係を打ち立てる手掛かりを与えてくれるように思われるということ。というのも、『生政治の誕生』は、統治の内的制限の原理としての政治経済学の登場からアメリカ新自由主義における経済分析の適用領域の大規模な拡張に至るまで、経済ないし経済学の問題を考察の中心に据えており、このことはもちろん、経済学の歴史的成立という出来事を別の文脈において詳細に分析している彼の主著『言葉と物』へと我々を送り返すからだ。すなわち、経済学をめぐる記述に焦点を定めることによって、一九七九年の講義と一九六六年の書物とのあいだの距離を正確に測る術が得られるように思われるのである。

そして最後に、本書がただ単にフーコーの思考を辿り直そうという思想史的興味を満たしてくれるばかりでなく、現在の我々が依然として囚われとなっている思考の地平から脱出する可能性を開いてくれるようにも思われるということ。そのような可能性を開く要素としてここに見いだされるのはもちろん、「生政治」ではない。現在において我々自身が新たなやり方で思考し始めるための契機として役立つと思われるもの、それは、一つの統治テクノロジーの相関物としての「市民社会」の問題化である。

現代史の問題。経済学の問題。市民社会の問題。もちろんここでは、これら一つ一つについて詳細な検討を行うことはできない。したがって以下、可能な分析の方向性のみを極めて大ざっぱなやり方で素描してみることにしよう。

現在の診断

まず、講義における現代史の扱いについて。この問題を考える上で最初に確認しておかなければならないこと、それは、本書のなかでもはっきりと語られているとおり、フーコーの研究がそもそも「現在」を出発点とするもの、「現在」を思考するためのものであるということだ。すなわち、彼が行う歴史研究は、決して過去についての無償の反省ではなく、「我々の直接的で具体的な現在」において提起されている問題へと常に送り返されるべきものなのである。しかしその一方で、彼は通常、自分自身が属する時代を研究の直接的な対象とすることはない。このことについても、たとえば『知の考古学』において彼自身が次のようにその理由を明言している。すなわち、自らがそこから出発して語る場所としての自分自身の現在に対しては、それを明確なやり方で論じるための十分な距離を置くことができないからだ、と。こうして、彼の研究においては、我々の現在についての問いかけから出発しながらも、我々が完全にそこに巻き込まれてはいないような地点にまで時間を遡ることが必要とされるのである。

それではいったいどういうわけで、本書においては新自由主義をめぐる同時代的な話題が前面に押し出されているのだろうか。一九六九年の著作において明言されていた方法上の原則からの逸脱あるいは転向を、ここに見いださなければならないということだろうか。しかし誤ってはなるまい。講義の全体としての構成がどのようになっているかを確認してみると、ここに見られるのが通常のフーコーの身振りときほどかけ離れたものではないということが明らかになるだろう。

なるほど、戦後の新自由主義についての分析が、量的に言ってこの年の講義の半分以上を占めているのは事実である。そしてその理由についてはフーコー自身による明確な説明がある。すなわち、講義の方向をいわば屈折させ、とりわけドイツ的形態の新自由主義について長々と話すことになったのは、それによって権力関係の分析に具体的なかたちを与えることができるかどうかを検討するためであり、そしてさらには、彼自身の現在を特徴づけていた「国家嫌悪」への傾向を批判的に検討するためであった、と。しかし、ここで見落としてならないのは、だからといって講義は現代史の問題に最後まで足をとどめるわけではないということだ。実際、最後の二回の講義において、分析は現在から過去へと移動し、自由主義の歴史的可能性を開いたものとしての「ホモ・エコノミクス」をめぐる諸問題が検討の対象とされることになる。つまり、歴史研究の起点としての現在の問題の見極めが通常よりもかなり長い時間をかけて行われているとはいえ、ここに見られるのは、現在を思考するために歴史を遡るというフーコーの通常の身

振りに他ならないのだ。彼が試みているのは、ここでもやはり、現在の問題を構成する諸要素の歴史的可能性の条件を標定することであり、そしてそこから出発して現在を思考する新たなやり方を提示することなのである。

そして、この講義においてとりわけ注目すべきであると思われる論点が提示されるのは、まさしくこの「ホモ・エコノミクス」をめぐる歴史的分析においてである。すなわちそれを通して我々は、フーコーの過去の仕事へと直接送り返されるとともに、現在の我々自身の思考そのものに関する批判作業へといざなわれることにもなるのである。

「見えざる手」

講義において十八世紀に出現するものとして分析されている「ホモ・エコノミクス」とは、自らの利害関心に従う者であると同時に、その利害関心が自然発生的に他の人々の利害関心へと収斂することになるような者のことである。「ホモ・エコノミクス」、それは、「見えざる手」によって自分の意図にない目的を達成するよう導かれるような者であるということ。ここから、本書と一九六六年の著作とがどのような地点において交叉するのかが示唆されることになる。すなわち、講義における自由主義の歴史的可能性の条件に関する分析においても、『言葉と物』における経済学という学問分野の成立に関する考察においても、西欧に起こったとされる歴史的転回を指し示すものとして与えられているのが、アダム・スミスという名前であるということだ。

本書においてフーコーは、アダム・スミスの言う「見えざる手」を「ホモ・エコノミクスの相関物」として特徴づけつつ、その「手」の側面よりもむしろ、「見えざる」という側面、すなわち不可視性という側面に注目すべきであると主張する。彼によれば、経済プロセスの不可視性は、ただ単に、プロセスの全体性を人間が認識することを妨げるものであるばかりではなく、それは「絶対に不可欠なもの」でもある。すなわち、経済プロセスの基礎そのものに、まさにそれが制御不可能であるという事実があるということだ。「ホモ・エコノミクス」は、自分自身の利己的な計算が経済プロセス全体にもたらすポジティブな諸効果を、その計算から逃れるもののすべてに負っているということ。ところで、ネガティブなものがポジティブなものを裏打ちするというこの思考、見えないものが見えるものを基礎づけるというこの思考こそ、一九六六年の著作において

フーコーが、十八世紀末に起こった知の布置の大変動とともに支配的となる思考として標定するものに他ならない。

『言葉と物』がやはりアダム・スミスの名前とともに示そうとするのは、「表象」をめぐる西欧の思考全体の根本的転回である。この著作によれば、十七世紀から十八世紀にかけてのいわゆる「古典主義時代」において、表象は、その諸要素のあいだに成り立ちうる結合を、自分自身から出発して基礎づける力を持っていたという。そうした表象の自律性が十八世紀の末に崩壊し、表象を基礎づけるものが表象それ自体よりも深く厚みのある一種の背後の世界のなかへと後退することになる。我々に与えられるものは、その根本的な秘密を、我々から常にすでに逃れ去るもののなかに持つと考えられるようになるということだ。確かにアダム・スミスは、ここでは「見えざる手」の理論家としてではなく、表象の分析に還元することの不可能な原理としての「労働」を提示した人物として語られている。とはいえ、ここで問題になっているのはやはり、「絶対に不可欠なもの」としての有限性、基礎にあるものとしての有限性をめぐる思考なのである。

したがって『生政治の誕生』は、『言葉と物』によって、というよりもむしろ、六〇年代の「考古学的」研究の全体によって開かれた考察を、別の方向へと切り開くものとして読まれうるだろう。すなわち、十八世紀後半の西欧における大なる転回が、知の領域に固有の事件として分析された後で、今度は新たな統治テクノロジーの出現との関連においてとり上げ直されているのである。このように本書は、六〇年代のフーコーによって開かれた問題系のなかに置き直されることによって、自らの射程をより明確なかたちで我々に示してくれるのだ。

ところで、『言葉と物』によれば、表象から逃れ去ったものを回収するため、ほどかれた表象の糸を結び合わせるために西欧の知の領野に要請されたのが、「人間」という形象であった。これと似たやり方で、『生政治の誕生』もやはり、統治から逃れ去るものを回収するために呼び求められる形象について語っている。統治の標的として要請され発明されるその形象、それが、「市民社会」である。

「市民社会」

この最後の点に関しては一つのエピソードをまず紹介したい。数年前、他ならぬ「市

「市民社会」をめぐる立ち上げられたある研究プロジェクトの主宰者の方に、そもそも「市民社会」なるものはいつごろから存在するのだろうかと尋ねたことがある。本書の内容を念頭に置いた訳者による多少とも欺瞞を含んだこの質問に対し、その方はやや困惑した面持ちで、しかし真摯に答えてくださった。すなわち、「市民社会」は太古から、いつの時代にも存在してきたと思う、と。

ところで、フーコーが「ホモ・エコノミクス」をめぐる考察のなかで示そうとするのはまさしく、「市民社会」、あるいは端的に言って「社会」なるものが、決して自然的所与でもなければ本来的で直接的な現実でもなく、自由主義的統治テクノロジーの相関物として十八世紀に出現したものであるということである。「市民社会」とは、「ホモ・エコノミクス」がその内部に置き直されることによって統治可能となるような具体的総体のことであり、自由主義の自由放任から新自由主義の社会介入主義への移行もそれによって初めて可能になるということ。「社会」とは、新たな統治テクノロジーによる介入の対象として歴史的に構成されたものであるということだ。そしてここから、フーコーが詳しく紹介しているファーガソンの著作の重要性も理解できる。講義の最終回にかくも長々と一つのテキストを引用することに何らかの意義があるとしたら、それは、「社会」を「歴史的かつ自然的な不変項」として考えるという、『市民社会史』のなかに見いだされる根本的な考え方が、フーコーの同時代において、そして我々の現在においても、おそらくは依然として広く受け入れられている考え方、共有されている地平であるからだ。そうした地平から脱出し、新たなやり方で再び思考を始めてみたいと思うなら、最近の発明品である「社会」など砂浜に描かれた顔のようにやがて消え去るだろうと言いつつ放すべきであろうか。むしろ、講義のなかのフーコー自身の言葉に倣い、「社会」とは「セクシュアリティ」のようなものであり「狂気」のようなものであると言った方が賢明であろう。「狂気が存在しないと想定してみよう、そうすると、狂気として想定された何かにもとづいて秩序づけられているように見えるさまざまな出来事、さまざまな実践について、どのような歴史を語ることができるだろうか。」おそらくこれと同じ問いを「社会」についても提出すべきだろう。「社会」が存在するということをア prioriに認めないとするなら、それまで「社会」の名のもとに自らを提示してきた実践や学問について、どのように思考することができるだろうか。これこそが、フーコーが我々に対して開いた問いであり、いまだにその現在性を保持している問いであると思われるのである。

現代史に多くの時間が割かれているとはいえ、講義は、ここでもやはり、現在の診断のための歴史研究というかたちで構成されているということ。経済学、とりわけアダム・スミスに関する記述は、六〇年代の「考古学的」研究と七〇年代の統治術をめぐる研究との絆を明らかにしてくれるということ。そして最後に、「市民社会」をめぐるフーコーの分析によって、現在の我々がいまだに囚われている思考の地平そのものが垣間見られるということ。以上はもちろん単なる素描にすぎず、それぞれの論点についてはいずれまた改めて詳細に検討し直す必要があるだろう。とはいえ、この『生政治の誕生』が、フーコーの研究活動における連続性と不連続性についての再検討を促すとともに我々を我々自身の現在に関する批判的反省へと導いてくれるそうした書物であるということに異論の余地はあるまい。別の仕方でも思考するための手掛かりが、ここに現前しているのである。

*

今回の翻訳作業もおいてもやはり、さまざまな方面から力をお借りすることになった。

まず、夏休みと冬休みに数回ずつ翻訳のための勉強会を開き、多くの方々に参加していただいた。そのなかでもとくに、『安全・領土・人口』の訳者として訳語の問題をはじめ数多くの貴重な助言を与えてくださった慶応大学の高桑和巳氏、そして経済学に関する専門的知識を惜しげもなく授けてくださった筑波大学の佐藤嘉幸氏、この両名の協力なくして本書は完成しえなかったであろう。

また、編者注におけるドイツ語引用箇所訳出については、明治学院大学同僚の磯崎康太郎氏に助けていただいた。不勉強な訳者の不躱な願いを快く引き受けてくれた氏に対しても、この場を借りて格別の感謝を捧げたい。

そしてやはり今回も当初の予定よりはるかに時間を費やしてしまいご迷惑をおかけしたにもかかわらず終始温かく見守ってくださった筑摩書房の岩川哲司氏には、もはやどのように謝意を表せばよいかわからない。すでに新たな仕事を一緒に進めさせていただいており、今度こそはとの思いでいっぱいである。

二〇〇八年六月二十二日

慎改康之